

TMATの活動について

TMAT活動報告 三浦 由紀子(メンリケルヘルスケア株式会社 ウンドケア事業部 クリニカルスペシャリスト WOC看護師/保健師)

活動期間:2011年4月8日~11日
活動場所:宮城県本吉郡南三陸町

震災時、郡内でも非常に大きな揺れを感じた。交通機関は寸断され帰宅困難となりオフィスで夜を明かした。甚大な震災被害が明るみになるに従い、自分も何か支援ができないかと登録できる災害支援団体を探した。在米友人から米国でも支援を希望する医療者が多く、派遣調整して下さる方がいると紹介頂いた。即連絡をとり、現在は日本で活動している私もTMAT米国のメンバーとして被災地での活動に参加することができた。発災後4週間に南三陸町に派遣された。出発直前に「自ら被災者でありながら医療者として働いている人の負担を減らす事も支援。いづれ現地の医療に戻す事を念頭に、現地に合わせた診療を心がけること」などを聞き自己を律する事ができた。現地では仮設診療所の活動及び近隣集落の巡回診療が主であった。メンバー同士は初対面であり専門性もバラバラであったが、全員が自己の専門性や職種に拘らず専門知識が必要な場合はカバーしあいながら臨機応変な活動ができ、短期間で強い結束が構築された。帰還直後、被災地で発生した重症褥瘡管理のために所属学会から支援要請があった。この活動においてもTMATの仲間から多大なアドバイスやバックアップを頂く事ができ、非常に心強く活動する事が出来た。そしてTMAT活動で教わったとおり現地に繋げるための足がかりを作る活動ができたと思う。

素晴らしい経験と仲間に出会えた事から感謝し、今後起こるであろう災害に今回の経験を生かすべく日々考え行動したい。



三浦看護師(一番左)とTMATスタッフ

震災当日、私はたまたま直明明けで午後1時に帰宅しました。自宅が高台にあり、被害は免れたものの、地震後停電となったため全く情報が入らず、町が壊滅的な被害を受けていることは分かりませんでした。翌日、自宅近くのペイサイドアリーナという総合体育館が避難所となっていたことに気づき、救護活動が始められました。震災直後は薬も聴診器も白衣も要請。一日に300~400人の診療を2人で行っていました。3月16日にTMATの高力医師他数名が支援に入り、その後続々と全国から様々な支援チームが入りました。しかし急激に支援チームや医薬品が入ったことで組織力のあるTMATに町最大の避難所であるペイサイドアリーナの診療と周囲の避難所の巡回診療をお願いすることにしました。TMATは昼夜問わず、一日150~200人の外来患者救急搬送患者に適切に対応していただき、安心して業務に専念することができました。統括本部の責任者として苦勞することの一つに、情報の伝達がありました。数日単位で交代するチームに医療システムの進捗、現場で様々な情報を正確に伝えることは非常に大変なことです。TMATの場合にはロジスティクスが情報を管理し、大勢の医療者の統制を行っています。安心して仕事を任せることができた。これも災害医療に精通し、日々訓練している賜物ではないかと思えます。

さて、南三陸町には公立志津川病院 病床数126床及び6ヶ所の内科診療所がありました。津波によりすべての医療機関が壊滅的な被害を受けました。しかし、TMATをはいじめとす全国から支援により、近隣の地域に比べ、比較的早く地元医療機関の自立に近づけることができました。ただし、ライプラインの復旧の遅れから、現在は30km離れた隣の登米市に入院機能を主体とする公立志津川病院を開設、町内には外来のみを公立南三陸診療所という形で2つの医療機関をわずかな医師で運営しています。新病院の完成までには5年程かかることが予想され、それまではこのような状況が続くものと考えており、引き続き長期的な支援を必要としております。

最後、今回の震災でTMATの皆様方にも多大な支援をいただき誠にありがとうございました。今後も災害時にはTMATの皆さんが、先頭に立って活躍されることを期待しております。

3月11日以降の東日本大震災の惨状を見て、少しでも被災地の方々の役に立てないかという気持ちが増し、強くなりました。現地に赴くことについて家族や勤務先からの了解は得ることが出来ませんでした。一方、参加希望を伝えたDMATからの返事は遅くして来ず、焦る気持ちも募りました。そんな中、NPO法人TMATの存在を知りました。DMATと同じ連絡をとったところ、私が全くの部外者であるにも拘らず、迅速に快く参加を許可して下さいました。

結果、南三陸町での診療に加えて頂くことが出来ました。現地では静穏期からの備えに「ご防ぎな死」を減らす鍵があるのだと実感しました。また、Incidental Command System等の指揮命令系統や、通信情報伝達ロジスティクスもまた実務的に極めて重要な役割を担っていました。短い期間でしたが、全国から高い志や熱い思いを持って集まった医療スタッフとともに学ぶ機会を得、私個人として深く感じるようなところがありました。この間、TMAT関係者の方々にも多くのご配慮を頂きました。この場を借りて深謝致します。また、最後になりましたが、被災地で今なお多くの困難に立ち向かわれている被災者の方々にも、一日でも早く、安寧の日々が戻れますよう心よりお祈り致します。

タンザニアで勤務している私にとって、3月11日以後テレビやネットで見られた日本の惨状は座して見ることの出来ないものだった。祖国日本に対して何が出来るか自問し、ジャマスタ東京(注1)のホームページで震災関連情報を掲載し始めました。ポアンティアという個人で被災地に入ることは難しい状況でしたが、NYの仲間がTMATの一員として被災地に入るという情報を得、鈴木ありさ先生のお力添えで参加の許可をいただきました。仕事上、外国の被災地での日本の医療支援チームの受け入れをしましたが、自分自身がポアンティアに行った経験は皆無でしたので、大きな不安をいだいた中で参加でしたが、心配は杞憂でした。南三陸アアリーナ内には診療所が確保され、全国から送られてきた薬品が十分にあり、看護師さんや薬剤師さん等スタッフが充実しており、一人で全てをこなしている大使館の医師より恵まれた状況でした。しかし、世界中から集まったボランティアが動きやすい環境にするために当初から現地入りし、日夜奮闘されたロジの鈴木さんや尾形さん等の苦勞は並大抵のものではなく、感謝の気持ちでいっぱいでした。皆様と親しくお話をさせていただいたのも、たいへん印象的でした。この出会いを今後生かしていきたいと思っております。改めてTMATに参加させていただいたことに感謝し、お礼申し上げます。



一軒一軒巡回診療にあたるTMATスタッフ

TMATと仙台徳洲会病院

石川 一郎 仙台徳洲会病院 事務部長

TMAT先遣隊四街道徳洲会病院より派遣が病院に到着したのは、3月11日の夜中でした。その時からTMATと仙台徳洲会病院の二人三脚の活動が始まりました。

TMATで感心することは、先遣隊の活動です。先遣隊の主な役割は、災害支援の活動拠点を探すが、まだ自衛隊も入っていない、地理も不案内で、死体も転がり、かつ余震が続き道路や橋が崩壊している状況の被災直後の被災地へ出向いて活動拠点を探すが、アムンゼンやリビングストーン、ヘーデン等のまさに命を懸けたプロフェッショナルの探検家の領域ではないかと思えます。

活動拠点が決まった後は、それぞれの災害において最も有効な活動形態が作り上げられてきたのだと思いますが、今回の東日本大震災では、TMAT本部と仙台徳洲会病院と災害活動拠点という流れが作られました。まずTMAT隊員約20名が東京本部に集合し、夜中の23時30分に出発し、朝6時に仙台徳洲会病院に到着。6時30分から全体ミーティング、朝食後7時30分に被災地へ出発。それが3月30日の連休まで毎日続けられました。全国の徳洲会グループの救急車をTMATの隊員に使用していただきましたが、私は病院の6階事務所から駐車場ゲートを次々と出発していき、徳洲会マーク入りの救急車を眺めては、その頼もしさと勇壮さに神々しさを感じたものでした。

今回TMAT活動の一環として、救急外来と病棟に医師、看護師の応援をもらったことは本当に助かりました。病院の職員も被災者が多く、応援がなければとてもやっていけない状況ではありませんでした。全国からの応援にありがたうございました。

「徳洲会らしさ」とは、弱きを助け、悪しきをくじくという徳田理事長の説く理念の具体的実践に表れると思います。その意味でTMATの活動は、徳洲会らしさそのものの活動の一つだと考えます。多くの徳洲会職員がTMATの活動に参加される事を望みます。

被災地で感じた災害知識の重要性

文村 優一 埼玉総合ハビリテーションセンター 医師

3月11日以降の東日本大震災の惨状を見て、少しでも被災地の方々の役に立てないかという気持ちが増し、強くなりました。現地に赴くことについて家族や勤務先からの了解は得ることが出来ませんでした。一方、参加希望を伝えたDMATからの返事は遅くして来ず、焦る気持ちも募りました。そんな中、NPO法人TMATの存在を知りました。DMATと同じ連絡をとったところ、私が全くの部外者であるにも拘らず、迅速に快く参加を許可して下さいました。

結果、南三陸町での診療に加えて頂くことが出来ました。現地では静穏期からの備えに「ご防ぎな死」を減らす鍵があるのだと実感しました。また、Incidental Command System等の指揮命令系統や、通信情報伝達ロジスティクスもまた実務的に極めて重要な役割を担っていました。短い期間でしたが、全国から高い志や熱い思いを持って集まった医療スタッフとともに学ぶ機会を得、私個人として深く感じるようなところがありました。この間、TMAT関係者の方々にも多くのご配慮を頂きました。この場を借りて深謝致します。また、最後になりましたが、被災地で今なお多くの困難に立ち向かわれている被災者の方々にも、一日でも早く、安寧の日々が戻れますよう心よりお祈り致します。

海外からの支援者の声(アメリカ)

鈴木ありさ トラガム&ウイメンズ病院 医師

その日、私は家族よりの無事を報告する携帯メールで最初の一報を得ました。友人でもある二人の在ボストンの日本人ER医に向けて、院内ポータルを使って「東京まで自力で来られるならば、そこからTMATに参加できる可能性があります。来るか?」とメッセージを打ちました。彼らの同僚で元英語教師のアメリカ人ER医、上級看護職の学生をしていただいた女性の計四名が第一便としてボストンを離れたのが始まりでした。TMATに参加したいというアメリカ在住の医療者は殺到しました。希望者としてアメリカに名前を載せた人数は全米より合計で医師26名、看護師(NP, PA含む)13名、小児臨床心理士1名、看護補助1名です。また、NukePierは合計5万錠近いヨウ素剤の寄付をうけ、これは日通ボストン社とフェデックス社の御好意により東京に迅速に運ばれました。米国日本人医師会JMSAからは組織を挙げての応援を受け、TMATの活躍は逐次英訳され全米に報告されていきました。

特にマサチューセッツ総合病院からは所属する医師のみならず、大量の放射線防護服とマスクの寄付、またセントオポグローバルヘルスより一人当たりの旅費千ドルまでの補助を受けました。この代表者がレッドソックスのチームドクターであることから、4月には本拠地であるフェンウェイ球場にてTMATのジャケットを着て始球式を勤める緑もありました。他にも州知事からの感謝状や、各学会での特別講演の招待などを受け、参加者もいます。アメリカからの参加者が一様に感じていることは、全く違う医療文化をもつアメリカの医療者を受け入れ、かつ、活用して、くれたTMATの度量の広さ、ロジをはじめとする組織の強さ、そして柔軟さです。毎日の電話での定期連絡および数々の手配を尽力してくださった東京本部、TMATに深く感謝をいたします。

奄美豪雨災害

成山 秀康 名瀬徳洲会病院 事務部長

平成22年10月18日夜より降り出した雨は記録的な豪雨に見舞われ場所により土砂崩れや冠水の被害が報告され、20日に病院内に災害対策本部を設置。被害状況の収集に当たった。20日の昼間に当グループわだつみ園の冠水報告が現地職員よりあり、被害確認のため職員を派遣したが土砂崩れによる通行止めの為に、現地への立ち入りが出来ない状況の報告が来た。経過の時点に加入電話番号が不通になり被災状況が把握できない為、現地入りし情報収集を手手段がないと判断し、21日朝に対策本部にて現地派遣の為の人員と、海路による移動の漁船確保を決めた。奄美市小湊漁港より出港用地区山間漁港へ到着、元徳洲会グループ職員で現建築会社職員の案内にわたつみ園入所者の非難状況の調査に当たったところ、入所者9名のうち2名が水死し安置されており7名の入所者の安否は確認された。入所者の中には濁流を飲み込まれた方もおり早急な対応が必要との判断にて、外部との連絡可能な宇検村及び瀬戸内管内まで移動することにし、崩落や土砂崩れ及び通行が困難な状況を確認しながら移動し、宇検診療所の桶田院長と面談。状況を説明し2名を移動し、宇検診療所へ搬送された。搬送状況を把握した。私は緊急車両の連絡。5名の受け入れを承けて頂き、現地入りした他のスタッフは漁船にて小湊港へ引返した。当方は瀬戸内徳洲会病院より職員を移動して頂き、宇検診療所より瀬戸内徳洲会病院へ移動。夕方徳洲会病院より定期飛行にてTMAT先遣隊が到着。瀬戸内徳洲会病院にて被害状況等の打ち合わせを行った。

翌22日災害対策本部のある住居合同支所(階へ入り)現地状況の調査を開始しTMAT本部の報告と支援依頼する。その後住居の避難先の奄美体験交流館へ移動。医療活動をしていった住居診療所長と打ち合わせ避難者の健康診断を開始。住居の園の同居者20名の受け入れを名瀬徳洲会病院へ依頼した。夕方瀬戸内へ移動しTMAT医療チームと合流し、翌日から活動方針を再検討。翌23日に再び被災地へ移動し救助活動を再開。各村の被災状況の調査を開始した。私は緊急車両の通行の解除されたので、救援物資を名瀬病院へ依頼。搬送を開始した。物資搬送車両に便乗させて頂き同日夕方名瀬病院へ移動。災害本部へ状況報告した。

その後他施設からの物資援助。人的応援等が開始され、鹿児島病院より院長他スタッフにより、手薄になった徳之島病院の業務を応援して頂き、救急活動の更なる充実が図られた。

東日本大震災 TMAT活動略歴

- 平成23年3月11日 東日本大震災発生
- TMAT四街道徳洲会病院内事務局(千葉県)が情報収集開始
- 同時進行で各地の医療チームが仙台徳洲会病院へ向かう
- 同日夜から翌朝にかけて各チームが陸路と仙台に到着
- 3月12日 仙台徳洲会病院を拠点に近隣地区の情報収集を開始
- 後方支援を担う事務局を東京本部に決定
- 3月13日 気仙沼地域にて医療支援を行うことを決定
- 3月14日 大船渡地区にて医療活動開始
- 別のチームは岩手県の被災地調査を開始
- 3月15日 宮城県気仙沼市階上地区にて医療活動開始
- 3月16日 宮城県南三陸町、岩手県大船渡地区にて活動開始
- 3月31日 大船渡地区への支援活動終了
- 4月2日 現地対策本部を仙台徳洲会病院からみやぎ仙台商工会へ移す
- 4月3日 階上地区での支援活動終了
- 5月3日 南三陸地区での支援活動終了
- 5月4日 本吉地区での支援活動終了
- 5月7日 東京の支援本部及び仙台の現地本部の撤収作業完了(現地での全活動終了)
- 6月5日 四街道徳洲会病院へ撤収した物資の整理作業を行い、東日本大震災支援活動を終了



東日本大震災活動概要

野口 幸洋(TMAT事務局・四街道徳洲会病院 管理栄養士)

平成23年3月11日 午後2時46分。TMATの活動拠点となっている千葉県四街道市でも大きな揺れを感じた。直ちに情報収集を開始し、東北沖が震源地である事と最大震度7であることを確認。その後大津波が襲来し、広範囲での津波被害情報が入った。午後5時頃、四街道が3隻を乗せた最初の先遣隊が救急車で仙台に向け出発した。同時に全国の医療チームに派遣を要請。距離的に近い山形(山形県)、新庄(山形県)の部隊はいち早く仙台へつき、病院に必要な物資の補給を開始。その日の深夜に四街道チームが仙台徳洲会病院に到着、翌12日までに24チーム計64名が同院に集結した。震災当初、仙台病院はライフライン障害により病院機能が失われており、地域の基幹病院である同院の機能維持が急務であると判断。支援チームは同院の病院機能維持に全力をあげた。同時に、周辺地域の被害状況について情報収集も開始。13日には、津波被害が甚大であった沿岸部4ヶ所(気仙沼市、石巻市、仙台市若林区・名取市、相馬市)へ先遣チームを派遣し状況を確認。全チームからの情報を集約し、被害が大きく、支援チームが皆無であった気仙沼を活動拠点とすることを決定。14日早朝、救急車3台計12名のメンバーが気仙沼市へ向かった。その後、宮城県気仙沼市の公立病院である市立本吉病院、同市市立階上中学校避難所、宮城県南三陸町ペイサイドアリーナ避難所、岩手県大船渡市リアスホール避難所の4ヶ所を拠点に活動を開始。医療チームは入れ替わり制とし、東京から毎晩シャトル便を運行させ、医療スタッフが滞りなく配置できるよう体制を敷いた。その後地元の医療機関の復活や、避難所の縮小を受け、5月4日気仙沼市立本吉病院の撤収を最後に約1ヶ月半に及ぶ現地での活動を終了した。活動期間中の合計診療数は15,677人、合計医療スタッフ派遣数は903名(延べ5,781名)、導入救急車数は32台(延べ1,185台)および、TMAT史上最大規模の活動となった。

西澤 匡史(公立南三陸診療所 診療部長)

震災当日、私はたまたま直明明けで午後1時に帰宅しました。自宅が高台にあり、被害は免れたものの、地震後停電となったため全く情報が入らず、町が壊滅的な被害を受けていることは分かりませんでした。翌日、自宅近くのペイサイドアリーナという総合体育館が避難所となっていたことに気づき、救護活動が始められました。震災直後は薬も聴診器も白衣も要請。一日に300~400人の診療を2人で行っていました。3月16日にTMATの高力医師他数名が支援に入り、その後続々と全国から様々な支援チームが入りました。しかし急激に支援チームや医薬品が入ったことで組織力のあるTMATに町最大の避難所であるペイサイドアリーナの診療と周囲の避難所の巡回診療をお願いすることにしました。TMATは昼夜問わず、一日150~200人の外来患者救急搬送患者に適切に対応していただき、安心して業務に専念することができました。統括本部の責任者として苦勞することの一つに、情報の伝達がありました。数日単位で交代するチームに医療システムの進捗、現場で様々な情報を正確に伝えることは非常に大変なことです。TMATの場合にはロジスティクスが情報を管理し、大勢の医療者の統制を行っています。安心して仕事を任せることができた。これも災害医療に精通し、日々訓練している賜物ではないかと思えます。

さて、南三陸町には公立志津川病院 病床数126床及び6ヶ所の内科診療所がありました。津波によりすべての医療機関が壊滅的な被害を受けました。しかし、TMATをはいじめとす全国から支援により、近隣の地域に比べ、比較的早く地元医療機関の自立に近づけることができました。ただし、ライプラインの復旧の遅れから、現在は30km離れた隣の登米市に入院機能を主体とする公立志津川病院を開設、町内には外来のみを公立南三陸診療所という形で2つの医療機関をわずかな医師で運営しています。新病院の完成までには5年程かかることが予想され、それまではこのような状況が続くものと考えており、引き続き長期的な支援を必要としております。

最後、今回の震災でTMATの皆様方にも多大な支援をいただき誠にありがとうございました。今後も災害時にはTMATの皆さんが、先頭に立って活躍されることを期待しております。

佐々木 美知子(気仙沼市立本吉病院 看護部長)

東日本大震災において本吉病院は津波で1階が浸水し、医療機器や診療材料等が失われてしまいました。残ったものは2階の入院病棟で使っていました。本吉病院スタッフの誰もが、恐怖と不安、暗闇と寒さ、失った物と闘いながら、次々とやって来る患者さんや守らなければならない入院患者さんと向き合っていました。先は見えないが、とにかく目の前の問題を解決していく事で精一杯でした。正しいか間違っているのかも分からず、パニックしそうな脳みそと疲労と沈んだ気持ちです。重たい体を引きずりながら、昼間の夜な夜なかき麻痺してきいた頃、3月14日、TMATさん達が病院にいらっしゃいました。心の中に光りのようなものを感じた瞬間でした。ずっと堪えていた涙さえ流れ始めた。日々、どんどん増えて行く外来患者さんに向き合う力が限界近くになっていました。本吉病院に助かりました。果も国も為し得なかったスピードでの対応は、被災地の人々にとってどれだけの力になるかという事を強く感じました。混乱していた院内全ての事に目を配っていただき、日に日に整備され、動きやすくなり、患者さんに対する接し方も心から大切に思えるようになっていきました。TMATさん達の働く姿勢が、私達を変えてくれたのです。そしてある時「これは本吉病院です。皆さんが前面で運営していかねばなりません。皆さんその為にも私達に指示をください、一緒に立ち向かいます。これから変わりました。ハッと目が覚めた瞬間でした。このように言われました。たとえ常勤医が居なくなっても、満足な材料が無くても、患者さんを守らなければ!こんなにも困っている人達に、自分が出る事の全てを吐いてあげたい!と強く思うようになりました。TMATさんは殆ど聴診器一本だけで患者さんを診ていました。短時間で病状の変化を見抜き、隠れた病気を見つけており、その凄さに圧倒されるばかりで、私達は日々強くなりました。明日への希望も持てるようになりました。あの支援があったからこそ、今の本吉病院があるのです。心の辛かった経験の間はなかなか消えませんが、戦いは続けられそうです。大きなご支援ありがとうございました。

3月11日の東日本大震災で私の故郷である「宮城県気仙沼市階上地区」も甚大な被害を受けました。その日の夕方、家の近くの避難所となっていた「宮城県気仙沼市市立階上中学校」に避難をしましたが、その4日後の3月15日に最初のTMATの支援隊が来てくださった。この日を今でも鮮明に覚えています。初めての大きな医療支援チームが来たことで私を含めた避難所のすべての人が安心して、勇気をいただいたことと思います。TMATのスタッフには中学校内の保健室を診療所代わりにして活動していただきました。私も手首を怪我していたのでTMATにお世話になり、それをきっかけとしてスタッフの方々と個人的にお話などさせていただくようになりました。

その一方で一生懸命活動してくれている皆さんに何かできることはないかと考え、温かい食事食べていただこうと思いつきました。最初は申し訳ないのせいで受け取れませんが、と言われましたが、余っていたのでぜひ「七味をつけて食べていただきました。今だから言える話ですが、みんなと一緒に食事をしたことは今でも忘れられません。それからさらにTMATの皆さんと仲良くさせていたが、楽しい時間を過ごすことができませんでした。スタッフの入れ替わりが早く、すぐに悲しい別れが来てしまう反面、多くの方と出会うことができました。野口さん、大橋さん、梅田さん、藍さん、中川さんや原田さん、ハリス先生をはじめとするアメリカから来てくださった先生方等とは皆さんの思い出を作らせていただきました。どれも忘れられない一生の思い出です。

東日本大震災で数え切れないほどの多くのものを失いました。しかしTMATの皆さんの素晴らしい活動のおかげで肉体的にも精神的にも支えられました。医療活動だけではなく、人間的にも素晴らしい方々だと思います。心の底から感謝しています。ありがとうございました。これからも復興に向けて頑張っていきます。

支え

三浦 翔太 階上地区高校性ボランティア(現気仙沼市消防隊員)



三浦氏(右)と野口(TMAT事務局)(左)